令和8年度鈴鹿市校内研修実施計画書

1　主題

子どもが自ら問いをもち、主体的に学び合う生活科・総合的な学習の時間の授業づくり	
教科・領域	生活科・総合的な学習の時間

2　主題設定の理由

現在、私たちは情報化やグローバル化が急速に進む「予測困難な時代」を生きている。このような時代を生き抜く子どもたちに必要なのは、与えられた正解を覚えることではなく、「自ら課題を見つけ、他者と協働しながら解決していく力」である。生活科における「気付き」や、総合的な学習の時間における「探究のプロセス」は、まさにこの力を育む中核を担っている。新学習指導要領改訂に向けた論点整理においても情報活用能力との一体化、教科横断的な学びの深化、カリキュラム・マネジメントの改善を通じて、質の高い探究活動の実現が求められている。このような背景から教科・領域を生活科・総合的な学習の時間と設定した。

生活科での人・もの・地域との関わりから生まれる「問い」や「思い・願い」を、中・高学年の総合における社会課題への「主体的な探究」へと滑らかにつなぐため、本主題を設定した。

本校の児童は目指すべき目標やゴールが明確に示された場面では、そこに向かって実直に努力し、頑張り抜くことができる力をもっている。一見おとなしく見えても、学習した内容について自分事として関連付けて考えられる子や独自の視点で思いや考えをもっている児童も多い。

一方で、慎重なゆえに「自分に自信がもてない（自己肯定感の低さ）」傾向があり、先の展開や活動の見通しがもてない状況になると、意欲的な姿勢が影を潜めてしまうという課題がある。「間違えたらどうしよう」という不安が先立つと、自分の考えを進んで周囲に表現することに躊躇してしまいがちである。しかし、本来子どもたちがもっている「目標に向けて頑張る力」は、生活科や総合的な学習の時間において原動力になる。だからこそ、教師が丁寧な足場かけを行い、子どもたちが「活動の見通し」をもてるようにすることが重要である。

自分が納得した「問い」をもち、プロセスの見通しをもって仲間と「主体的に学び合う」ことができれば、「自分の考えで進められた」「仲間とゴールにたどり着けた」という確かな手応えにつながる。本主題への取り組みを通して、子どもたちが不安を安心へと変え、学びの主役として自己肯定感を高めていく姿を目指したい。

教師が用意したレールの上を子どもに歩かせるのではなく、子どもが「自ら問いをもつ」ためには、教師がどのような環境を構成し、どう見守るべきか。また、「主体的に学び合う」ためには、どのような対話の場を設定すればよいのか。生活科と総合を連動させて研究することで、全校で「子どもが主役の授業づくり」の具体的な手立てを共有できると考え、本主題を設定した。

3　研究内容及び方法

研究の方法

(1)カリキュラム・マネジメントの推進(全体計画・単元配列の最適化)

子どもたちが単元の見通しをもち、安心して探究に向かうためには、学校全体の教育課程の整理が不可欠である。生活科および総合的な学習の時間と、他教科(国語科の表現、社会科や理科の調査活動など)や特別活動との関連性を明文化した「探究学習計画」を作成する。探究の熱量が高まった時期に集中して時間を確保できるよう、モジュール時間の活用や、週当たりの時数配分の工夫(弾的な時間割編成)を検討する。

(2)子どもの思い・願いを大切にした探究計画の作成(見通しの可視化)

「○年生はこの探究課題でこの活動」というように毎年の学習をなぞるように取り扱うのではなく、子どもの身近な生活の中から問題場面に出会わせ、切実感をもたせるようにする。そこから子どもの興味関心を引き出し、子どもが課題を設定し、主体的に探究しながら問題解決を図るような活動になる手立てについて研究していく。

また、目標があれば頑張れるが、見通しがないと不安になる児童の実態を踏まえ、子ども自身が「学びのロードマップ」を描けるような工夫を行う。「課題設定(次の課題)」「情報収集(調べよう)」「整理分析(整理しよう)」「まとめ・表現(まとめよう)」といった探究のプロセスを教室内に可視化し、今どこにいて、次はどこへ向かうのかを子ども自身が常に確認できるようにする。活動の節目に「振り返り」の時間をおき、「次にやってみたいこと(新たな問い)」を子ども自身が選択・決定して探究計画を更新していく活動を仕組み化する。

(3)「出会い学習」の充実(問いを生み出す環境構成)

自己肯定感や発言への意欲が低い子どもたちの「内に秘めた思い」を揺さぶり、切実な問いを引き出すための「リアルな体験」を重視する。

①地域の専門家や魅力的な場所、五感を刺激する本物の素材と出会う場を意図的に設定する。

②地域の方々から認められる経験を通して、「自分の活動が社会とつながっている」という手応えをもたせ、自己肯定感の向上につなげる。

③「出会い直し」のある出会い学習をおこない、出会って生まれた問いについて、繰り返し尋ねることで学びを深めたり、学びの成果を伝えることで成果を実感したりすることができるようにする。

(4)「架け橋プログラム」の充実(幼保小・小中の円滑な接続)

見通しをもてない不安感を解消し、主体的に学び合う姿勢を校種を越えてつなぐ。

幼保小接続(スタートカリキュラムの充実):幼稚園・保育園等での「遊びを通した主体的な学び」を、1年生の生活科を中心とした「安心感のあるアプローチ」へと滑らかにつなぐ。幼児期に育まれた「やってみたい」の芽を摘まない授業づくりを研究する。

⇒生活科・総合的な学習の時間の充実には「つなぐ」「つなげる」「つながる」を合言葉に人とのつながりや学びのつながりを紡いでいくことが効果的であると考えている。どのようなつながりが、どのような手立てによって生まれたのかを検証していく。

(5)教職員の協働

子どもたちが主体的に学び合う姿を目指すのと同様に、教職員自身も「協働して学び合う」研修体制を構築する。

「部分公開」や「日常的なミニ交流」の推進:一人の授業者がすべてを背負う一大研究授業だけでなく、学年部やブロック内での「授業の一部分(導入の出会い学習のみ、振り返りの場面のみなど)を見せ合う活動」や、放課後のちょっとした実践交流(プチ検討会)を日常化する。